



肉用牛肥育経営は、子牛価格の高止まりで厳しい経営環境にあり、もと牛導入に苦慮している状況です。打開策の一つに、県内で肥育もと牛の多くを占める去勢子牛に比べて導入経費を抑制できる雌子牛の活用が挙げられます。

畜産研究部門は既に、黒毛和種去勢牛において肥育前期に良質な粗飼料を多給して第1胃の発達を促し、飼料の利用率を高める「長崎型新肥育技術」を確立。肥育期間を2カ月ほど短縮しても、通常牛に劣らない枝肉成績が得られています。

今回、雌牛でも同様の結果が得られるか検証するため、粗飼料多給区と超粗飼料多給

区を設けて肥育試験を行いました。その結果、超粗飼料多給区は粗飼料多給区に比べて枝肉重量が大きくなる傾向が見ら

## 雌牛の長崎型新肥育 平均超える枝肉成績 もと牛導入費を抑制

黒毛和種雌牛の枝肉成績

	出荷 月齢 (カ月齢)	枝肉 重量 (kg)	ロース芯 面積 (cm)	バラの 厚さ (cm)	皮下 脂肪厚 (cm)	BMS No.
粗飼料多給区 <sup>1)</sup>	27.5	438	56.5	8.1	3.3	7.3
超粗飼料多給区 <sup>2)</sup>	27.5	450	56.3	8.3	3.2	7.2
参考(県平均) <sup>3)</sup>	28.7	437	57.4	7.6	3.1	6.3

1) 粗飼料多給区：肥育前期の日増体量1.0kgに要する可消化養分総量(TDN)の60%を濃厚飼料から摂取する区

2) 超粗飼料多給区：肥育前期の日増体量1.0kgに要するTDNの40%を濃厚飼料から摂取する区

3) 県平均：2016年次県産黒毛和種雌産子の肥育成績平均値

れましたが、両区の枝肉成績に有意な差はなく、県平均と比較しても同等以上となりました。

この研究成果は出荷の回転率を高め、コスト縮減につな

がるものです。雌牛版の「長崎型新肥育技術」として活用してください。

(県農林技術開発センター 畜産研究部門 大家畜研究室 主任研究員 早田剛)